

広瀬崇子・堀本武功編著

『アフガニスタン——南西アジア情勢
を読み解く——』

明石書店 2002年 260ページ

やま ぐち ひろ いち
山口 博 一

本書は、「アフガニスタン問題を知るために」、
「パキスタンから見たアフガニスタン問題」、
「中央・南アジアから見たアフガニスタン問題」、
「国際関係のなかでのアフガニスタンと『対テロ戦争』後
を考える」の4部構成をとっており、11人の執筆者
が12の章を分担している。昨年（2001年）10月下旬
に開かれたシンポジウムを基にしており、1月20日
の出版にこぎつけるまでには関係者の一方ならぬ努力
があったと思われる。各部はそれぞれ表題に応じた
内容で、時宜を得た出版である。内容を検討した
後、気になる2つのことを述べたい。

1. 本書の内容

アフガニスタンの紛争にはたしかに同国内の「民
族的・政治的対立」（36ページ）があった。しかし
ソ連の侵攻以来、この対立を国際的要因がどのよう
に活性化したかにも注意が払われている。なお、ソ
連の侵攻はアメリカその他が仕掛けたのだというア
フガン・トラップ説には触れていない。

パキスタンにとってアフガニスタンは「戦略的深
さ」を提供するものであった（30ページ）、パキス
タンは「西の安定を確保して東のインドと対峙」し
たという分析には賛成である（75ページ）。この点
を含めて、第3章（広瀬崇子）の2枚の図とその説
明は、アフガニスタンをめぐる国際関係の要を得た
説明を与えている（66～72ページ）。

チェチェンとアル・カーイダが関係あるとされ
（160ページ）、アメリカはロシアのチェチェン弾圧
の容認に変わったとする（32ページ）。たしかに周
辺諸国の関心は「人権問題を通じての米国の介入・
圧力をなくさせること」（152～153ページ）にある。
これらは今回の戦争のツケとなって残るであろう。

『アジア経済』XLIII-5（2002. 5）

カシミール問題はパキスタン国民にとって「譲歩
できない」ものと見られている（84ページ）。ムシャ
ラフ大統領も1月の年頭演説で同様の趣旨を述べた
が、読者に対しては別の選択肢の提示もできたので
はないか。しかし、2月27日からのインドの宗教暴
動はカシミールの解決をさらに遠ざけたと思われる。

日本の貢献に関しては、教育、人的インフラが挙
げられている（241～242ページ）。それは当然だが、
当面の課題は生産基盤、特に農業の再建を灌漑施設
の復旧や地雷撤去などと組み合わせ、難民の帰還
を容易にすることであろう。

2. 政治的イスラームの起源

第9章（大石高志）には『『イスラーム原理主義』
の南西アジア史的文脈』という節がある。この観点
が全体にもっと出ていればよかったと思う。たとえ
ばイランにおけるイスラームの台頭を理解するには、
1953年のクーデタにさかのぼる必要がある。エジプ
ト思想史は断片的に出てくるが（207, 211～212,
235ページ）、エジプト人でアル・カーイダの思想的
黒幕といわれるザワヒリは出てこない。パレスチナ
問題がまったく触れられていないが、オサーマ・ビ
ン・ラーディンがなぜパレスチナを語らざるをえな
いのかを論ずる必要がある。これらは相互に関連が
あり、ブッシュ政権の最初のパレスチナ政策声明も
アフガン作戦のさなかに行われている。

3. アメリカの戦争

タリーバーンやアル・カーイダの出現にアメリカ
がどう関与したかは十分に語られている。しかし、
「アメリカは……何を攻撃しているのか」（87ペー
ジ）の答えは十分だろうか。アメリカの行動は正当
化されるのか、戦争を通じてアメリカは何を達成し
ようとしているのかが問題である。2月27日にシカ
ゴ大学で物理学者たちが核の終末時計を2分だけ早
めたのは、ほかならぬアメリカの政策に危険を感じ
たからである。燃料気化爆弾の威力は戦術核兵器の
一歩手前のものだという。そういう実績を作ること
で核兵器使用への抵抗を少なくしている。アフガニ
スタンを論ずることがいかに「我々の安全と平和へ
の道筋」（「刊行にあたって」水島司）につながるか
が問われるのである。

（文教大学国際学部教授）